

## 海 卓 子

私は昭和二年に土川五郎先生（律動遊戲）の創始者が、はじめて保育科をお作りになった、その第一回生です。そして、そこで倉橋先生の講義も週四時間うかがいました。それまでは女学校におりましたが、つまらない学校だったのです。五年生の時、偉い先生が修身をやって下さったのですが、女とは何か、人生とは何かを

語るのかと思つたら、「良家の子女は……云々」などとおっしゃる。私、良家の子女かしらと考えました。ばかばかしくて聞いていられない。これが教育かな？ と思つた。ところが倉橋先生のお話を聞いたら、また教育とは何とすばらしいものかと思ひました。どんなふうにすばらしいかと言いますと、まず倉橋先生は「自然と一致することは、子どもの榮譽である」——これはスタンレー・ホルの言葉だそうですね——「子どもと一致することは教育者の榮譽である」と。自然と一つになるというのは芸術の心ですね。雑念の入った芸術なんてございませぬね。「あれ？ 教育は芸術じゃないか」と思つたのです。教師が子どもと一致するためには、教師が自然と一つにならなければならないということです。

幸いなことに、私は田舎育ち。だから自然が大好きなのです。兄弟がいないから、子どもが大好きだったのね。あつ、もしかしらなれるかもしれないなと思つたのです。それで先生のお話に我を忘れて聞きほれたのです。

さて、昭和三年に市立幼稚園に勤めました。そうしたらまた、おったまげちゃつた……。その前、学生の時にお茶の水でどんなことをやっているか見学に行きました。子どもは、三々五々自由に遊んでいます。花壇のそばで、部屋のすみで、またどこかによりかかつてお友だちとおしゃべりしている子もいました。少したつたらピアノがなつて、どこからともなく子どもが集まって来ます。まるで手品みたい。に。「いけません」なんて言う先生はいなくて、みんなで体でおどっているんです。それで、「いつお集めになるんですか」と聞いたら「ごはんの時です」。それでまたびっくりしたのです。こういう樂園もあるのだと。

昭和三年に幼稚園に勤めましたら、なんと机と椅子がくっついていてのです。歌はどういうのかというと「奈良の、奈良の、大

仏さんに、スズメが三羽とまって、なんといって鳴いてます。チュンチュンチュン、チュンチュン」。この歌にどれだけ共感するのでしょうか。ヘーと思ったわけね。ところが主任保母は四十いくつかのおばあちゃん。おばあちゃんといったら悪いかな、私なんか、大おばあちゃんになっちゃう。この先生がいる限り何もできないなあ、正直なところ思いました。今、若い先生が私のことをそう思っているかもしれません。

その頃東京市は、日本橋、京橋から幼稚園が小学校に付設されました。子どもがいなくなったから空教室を幼稚園にしようというわけです。これは幼稚園教育の普及と思つたら、ちょっと違うのね。そこで、先輩はみんな新設園の主任保母として出ていく。

その結果私は、二十四歳で主任保母ということになりました。その他に二十二歳と二十歳の保母で、これじゃ経験がないから、いやでも話し合わなければなりませんね。三人が頭を寄せて知恵を出し合つて、気が向けば八時まで仕事をする。一方「今日、いい映画きているのよ。見にいきましょう」と二時頃帰ってしまふ。

保育の仕方は、倉橋先生にうかがつた自由保育だったんです。まず、畳の部屋の改造でした。付きそいが待っている部屋です。そこを「ままごと」の部屋にする。また、若い二十歳代なのに「じいや」「ばあや」と呼ばれる小使さんが、蜜柑の空箱で机や茶

簞笥などを作ってくれた。年長の子どもが果物のアップリケのカーテンを作り、年中組の子どもは絵を描いてかざるのですね。いわゆる縦割り保育です。三歳児から五歳児まで、そこでたまって遊ぶのです。そうしましたら不思議なことに、ジャングルジムに登つて四歳の子どもが何とつぶやいたと思いますか? 「奥さん、メイトル調べです。お宅随分使いましたね」と。生活遊びですね。その前の保育は、百年史スライドで御覧になった明治時代のあの恩物ですよ。折紙、織紙、組紙、箸並べ、板並べ、環並べ、というのね。それをやっていたのです。私が勤めて四年目ですから、昭和七年からはじめて自由保育に変わったのです。

ところが問題も出てきました。ボスができてしまったのです。その幼稚園は屋敷町と商店街の谷間で両方の子どもが来ている。だから町の子と、おぼっちゃんお嬢ちゃんがいる。それでそのおぼれつ子に誰もノーと言えなくて、大ボスにのしかかっています。一昨年でしたか幼稚園の同窓会を開いた時に、五十歳位のオヤジさんが「先生はいつもあのおつかない鼻たらした、あの何と言ったつけないあ、あの男の子について歩いていましたね」と言っていました。その子の名前は忘れません。わきおちゃんというんです。その子にはさすがに手を焼きましたね。どうして良いかわからない。これが私の悩み始めですね。

始めはいろいろな講演会に聞きに行ったり、本を読んだりしていたんです。たまたま昭和十年ごろ、保育問題研究会ができて、城戸幡太郎先生が会長で、山下先生とか、今の元老格の先生方が三十歳そこそこでしたね。それぞれの専門分野の方が集まって、ざっくばらんに物が言えた訳です。

その頃の公立幼稚園というと、園長が被布を着ていらつしやつて、静々とお出ましになると、主任がバツとぞうりを揃える。ちよつとモタモタすると「何しているのよ」と怒鳴られた。権威者だったのです。そういう会合でうっかり発言すると「あんたの所の若い人変なこと言ってたわよ。気をつけなさい」と叱られてしまう。公立の幼稚園がその頃まだ明治時代の保育をしていたということは、職員集団が縦の人間関係で自由に話せなかったという事です。だからいくら倉橋先生が名講演をなさいしても、それはその場だけの話で浸透していかない。公立幼稚園に浸透したのは昭和七年。ところが、昭和六年には満州事変がおきています。昭和十二年には日支事変に発展しているんですね。昭和七年から五か年位が「自由保育花盛り」ということになりましたよ。それから戦争の方に傾斜していくのですね。

私は昭和十七年までおりましたけれども、もう昭和十年位になりますと、戦時色が出て来ました。子どもの遊びも、兵隊さんご

っこ、看護婦さんごっこに変わってくるわけですね。しかも小学校に付設の場合は、朝礼も一緒にする。幼稚園の子がざわざわと騒ぐと、見学している親が非国民だと校長に言いつける。「幼稚園の子どもがさわいでもいいも、先生は何も言わない。あの先生は非国民だ」というわけです。「自由保育」どころではありません。大正六年に倉橋先生が「会集はおかしいからやめましょう」と言つて廃止しました。「大人っていうのはどうして子どもを自分の身の回りに集めるのが好きなんだろうね。子どもが集まってくる所へ、大人が足を運びなさい。そうすれば、何かつぶやいている。水溜りがあれば足でパチャンと蹴る。石をパチャンと入れる。のぞくと、影が映る。そういうことがあるもんですよ。それを子どもといっしょに楽しみ、そこから保育が始まるのです」とおっしゃった。それが、いつの間にか国家目標による保育に切りかえられたつあったのですね。

そのように大正時代の自由保育は、非常に時間が短かったので。戦後の新教育が誕生した時、大正時代に一生懸命に自由主義保育あるいは自由主義教育をなさった方が、それをもう一度思い出してやった時、CIEの人が公開保育を見に来て「あなたは誰に教わったんですか」と言いました。研究授業をした女の先生は「私は大正時代に教わりました」と言われました。当時、プロジ

エクト・メソッドとかドルトン・プランとかいって、講習や研究会が行なわれたのです。いわゆるプロジェクト・メソッドというのは、幼稚園で言えば、ごっこ遊び、誘導保育と言われるものですね。つまり大正の自由主義保育というものが、ほんの短い期間で浸透するかしないうちに、回れ右しちやったのです。全国的には本当に浸透しないうちに、国家目的の下に全体主義的教育に巻き込まれてしまったのです。

今現在、私が大変気にしていることがあります。というのは、大正、昭和の始めには、子どもたちの意見が対立しますね。たとえばある子どもが「仏様の方が偉いんだよ、おまえ」と言うところ、ある子どもが「違うよ、天皇陛下の方が偉いんだよ。うちのお父ちゃんが言ってたもん」。そうすると、仏様の方が偉いということ、子どもの方が、「うちのおばあちゃんが言ってたもん」と言うんですね。終戦後、昭和二十二年にうちの幼稚園が始まっていますが、それからまあ二十七、八年位までは、おじいちゃん、おばあちゃんという言葉が出ました。その後何になつたろう？「パパが、ママが」です。今は誰が出るのだらう。「あら、よく知ってるね、だれに教えてもらったの」「テレビで見たもん」。ひどいものになると「図鑑に書いてあったもん」と言つて、お父さん、お母さんが出て来ない。おじいちゃん、おばあちゃんはもちろんとう

に消えてしまつてゐる。それは何なのでしょう。

それからもう一つは、たとえばモンテッソーリ教育とか、ピアジェとか、いろいろな教育論が出ておりますね。ところがそれは、大正自由主義の時に一べん否定されたものです。否定されてもいいのです。良い所があるので、その良い所をもう一度いたたくのはよろしい。けれど日本人は一辺倒なのです。ああ、モンテッソーリ、モンテッソーリ、ああ、ピアジェ、ピアジェとなるのね。子どもの実態を見てほしい。もう一度倉橋先生にご登場願つて「子どもとは、本当はなんだろう、何を感じているのか。今ぶつぶつと言つたのはどういう意味なのか」と。鈴木先生がおっしゃいましたね。「先生と子どもじゃない。家にいる素顔が保育所で出ているんだ」ということ。素顔が出る環境というのは健康なんです。今の幼稚園の子どもが、保育所の子どもが、本当に素顔を出しているかということ。素顔を出せる環境がないですね。広い庭がないでしよ、草がない、泥もない、水も使えないでしよ、虫もいないし、葉っぱも落ちていない。これで何で素顔が出せるんですか。大人の労働が子どもの目の前から消えた。子どもも手や足を使わなくなった。ないないづくしの保育をどうするかということが、今後の大きな課題ではないでしょうか。

(白金幼稚園)